MEETING REPORT

Keystone Symposium に参加して

参加者の power に感心

癌細胞学研究部
生田統悟

Taos Pueblo. アメリカインディアンの集落である。

2月下旬から3月上旬にかけて New Mexico 州 Taos で開かれた Keystone Symposium に参加した。博士課程の4年間、1度は海外の学会へと思っており、絶好の機会であった。しかしながら、初めての海外経験であり、その不安から学会直前になっても何の準備もせず、「行きたくない」を繰り返していた。

空港から Taos へは砂漠と低木の続く約3時間の道のりである。日本中に知れ渡った Santa Fe を過ぎた頃、キーを閉じこみレンタカーの窓をたたき割るというアクシデントにも遭遇した。

会場は日本風に言うと公民館である。私が参加したのは PKC と脂質の合同シンポジウムである。小規模であるがゆえにテーマが集中しており、自分の研究分野に対する見識を深めるよい機会であった。このシンポジウムは、別名スキーシンポジウムと呼ばれ、朝から深夜までハードなスケジュールである。午前8時から11時まで講演、11時から午後4時まではフリータイムであるが、田舎町ではほかにすることもなく、スキー場へ行くことが半ば義務付けられている。4時から6時までが示説、夕食後8時から11時まで再び講演がある。老いも若きも研究者たちは皆 tough である。

自分の発表では1人でも多くの人をつかまえることを心がけたが、自分の考えている事は何とか言えても、相手の言うことの半分は理解不能である。ただでさえ日本人はディスカッションが苦手といわれるのに英語力の無さは致命的である。2人に続けて同様な質問を受けたとき、2人めの人に私が言葉に詰まっていると、私を抜きにしてその2人でディスカッションが始まってしまったのには危機感を覚えた。

最終日の前の晩には banquet が催され、それまでの公民館がきれいに飾られた。学問する時には学問、遊ぶ時には思いっきり遊ぶという人達の「power」を感じた学会であった。

編集後記

この度、医科研広報パンフレット「医科研NOW」発行に当たり、編集長としてこの新たな試みに参加することとなりました。しかし、編集などと言う事には、小学校時代の学級新聞以来無縁の生活をしてきたので何事もとまどう事ばかりでした。何とか無事に第1号の発行にこぎ着けたのは、偏に、快く協力していただいた皆様のお蔭と感謝しております。

創刊号と言う性質上、内容的には色々と不備な点もあろうかと思いますが、全国一の規模を持つ医学・生物学系の附置研究所である医科学研究所の活動を解りやすい形でお伝えすることを目指し、更に改善を加えながら、皆様に理解していただく上で些かでも役に立つものを作って行きたいと考えております。 (渡)

○医科研 NOW 編集室／〒108　東京都港区白金台4-6-1 東京大学医科学研究所 ☎03-5449-5298
委員長：渡邊俊樹　委員：北　潔・菅野純夫・小澤敬也・井桁幹隆・仲澤　宏・藏野妙子・松木恵司